

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 坂井真紀子 印

学位申請者 米川 正子

論文名 Political Use of Prolonged Displacement, Encampments, and the Peace Process through Third-Party Intervention—A Case Study of the Democratic Republic of Congo's Protracted Conflict—

< 審査結果 >

審査委員会は、主査に坂井真紀子（アフリカ農村社会学）、副査としては間寧（比較政治学）、武内進一（アフリカ政治）、清水奈名子（国際機構論）、篠田英朗（平和構築）の5名によって構成され、それぞれ専門の見地から論文を精査し、内容を詳細に検討した上で、2023年10月25日に公開の最終審査を行った。その後、論文および最終試験の内容について協議を行った結果、本論文は、本学大学院が学位授与のために定めた基準を十分に満たしており、優れた高い学術性を有していることが確認された。よって審査委員会は全員一致で、米川正子氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であると判断した。

論文および審査の概要は以下の通りである。

< 論文概要 >

本論文は、長期化する武力紛争の要因を分析する問題意識にそって、外国勢力などの第三者介入が及ぼす影響について分析を行ったものである。本論文が特に着目するのは、避難（難民）（displacement/refugees）、キャンプ化（encampments）、和平プロセス（peace process）の三要素である。これらの要素のそれぞれを通じて、武力紛争を長期化させる要因が介在してくる。事例としては、コンゴ民主共和国東部地域で長く続く武力紛争に焦点をあてた。1994年ジェノサイドを通じて政権を奪取したウガンダ領内のルワンダ難民が中心になって形成されたルワンダ愛国戦線（Rwanda Patriotic Front: RPF）の勢力は、1990年代後半以降、今日に至るまで、コンゴ民主共和国東部地域の武力紛争の構図に深く関わってきた。その介入の過程の中で、ルワンダは、武力紛争を長期化させる要因を働かせる主要な外部介入アクターとなった。本論文は、この過程を、文献渉猟と現地聞き取り調査の結果をふまえながら、時系列にそって丁寧に描写していく。本論文で評価すべきは、明確な問題意識と、現地の人々に対する丁寧な聞き取り調査に代表される豊富な情報量を組み合わせた点にある。その論述を通じて、外部介入者が、難民、キャンプ化、和平プロセス

の三つの紛争長期化の変数を政治的に操作していく様相が描き出される。

本論文は、序論、結論を含めて、9つの章からなっている。

本論文の第1章は、第1章では、問題意識の表明と、リサーチクエスチョンの設定、及び方法論的な枠組みの提示が行われる。リサーチクエスチョンは、「どのように、そしてなぜ、主要な介入者は、第三者の支援を受けて、紛争を維持し、長期化させることができるのか、特に避難（難民）、キャンプ化、和平プロセスという第三者介入によってしばしば促進される三つの長期化変数を操作することによって」、というものである。本論文は、この問いへの答えを、コンゴ民主共和国東部地域の武力紛争を題材にして、探究する。

第2章は、先行研究の渉猟にあてられる。長期化する紛争の定義から始まり、その背景にある要因に関する議論が概観される。そこで中心的に論じられるのは、長期化する武力紛争にはどのような要因が働いているのか、という問いに対する既存の研究の成果である。

第3章は、戦争の惨禍から逃れて難民化する人々が、武力紛争の長期化の構図に組み込まれていってしまう様相が論じられる。長期化する武力紛争に利益を見出す諸勢力によって、難民が武力紛争の行方に影響を与える要素となっていくという視点は、本書を特徴づけるものである。具体例として、アメリカの介入が紛争の長期化要因として働いた事例をとりあげ、難民やキャンプ化がどのように戦略的関心から操作されたかを検証する。

第4章は、1990-94年のルワンダ情勢に焦点をあて、和平合意をめぐる政治的な動きが、ジェノサイドにつながっていく過程において、外国勢力や難民たちの思惑が交錯する様子を描く。ウガンダの難民であったルワンダ愛国戦線（Rwandan Patriotic Front: RPF）を形成した政治指導者たちが、自らの軍事的勝利などの政治的利益を追求する過程において、紛争を長引かせる要因として働いたことを検証する。

第5章は、ジェノサイド後に権力を握ったルワンダの旧難民の勢力が、隣国ザイール（現在のコンゴ民主共和国）に介入し、凄惨な武力紛争の勃発に大きく関わっていく様子を描く。ザイールに生まれた難民キャンプをルワンダの安全保障上の脅威とみなした RPF 政権は、ザイールへの介入を深めていく。それは、難民の問題が、政治的利益を持つ勢力によって政治的に操作される過程でもある。

第6章は、1998年から2003年のコンゴ民主共和国東部地域の武力紛争をめぐる政治過程の中で、第三者介入が紛争の長期化につながる要因となっていく様相を描く。ルワンダ政府のさらなるコンゴ民主共和国の紛争への介入が、長期化要因として働いていく様相を示す。

第7章は、2003年-2018年の国連PKOの展開なども発生した時代において、なお武力紛争が終息せず、長期化していく様子を描く。紛争後の段階に入ったともみなされた時期のコンゴ民主共和国においても、ルワンダの介入の姿勢は、紛争が長期化していく要因と

して働いた。

第 8 章は、1988 年から 2018 年という本論文が扱った時代の中で、難民が政治的操作の対象となり、武力紛争の長期化に利益を見出す勢力に翻弄される仕組みを、整理する。ルワンダのコンゴ民主共和国に対する執拗な介入の姿勢の背景に存在すると思われる民族イデオロギーの要素を特筆しつつ、そのイデオロギーの中で難民の存在がどのように操作的に扱われてしまうのかを論じる。

終章では、あらため本論文の成果とともに結論の提示が行われる。加えて、さらなる研究が必要になる領域に関する議論が示される。

< 審査概要および評価 >

本論文で評価すべきは、長期化する武力紛争の背景にどのような要因があるか、という大きな問いを設定し、外国勢力をはじめとする第三者介入が大きな影響を及ぼし得るという点を、一貫して論じ切った点である。事例研究の対象に選定したコンゴ民主共和国東部地域の実情に非常に明るく、現地に住む人々との関係も構築されていることから、文献渉猟から聞き取り調査に至るまで、非常に濃厚な情報が提供されていることは、評価に値する。他方、数百万単位の人々が悲惨な境遇に追い込まれた事例を扱っているだけに、問題意識が明確で先鋭である反面、ややそれが先走って学術的裏付けに不足感があるとみなされかねない箇所が見られたことは残念であった。これは相当程度に文章表現上の技巧的なレベルの問題であるとも言えるが、ややもすると本論文全体の学術的意義にもかかわらないとも限らないため、審査委員から非常に具体的な論点の指摘とともに、懸念が表明された。

最終試験は 10 月 25 日（水）の正午から 14 時まで約 2 時間にわたり ZOOM を用い公開で行なわれた。審査委員から提起された問題点等に対しては、米川氏から真摯で的確に応答がなされた。質問は、論文が用いている諸概念の明晰性や使用方法、理論的枠組みとなっている先行研究の渉猟の方法、濃厚ではあるが対象者数は限定されているフィールド聞き取り調査の成果の活用法、時系列にそって展開する章構成をはじめとする議論の方法、本文を補足する図表の使い方、論文の学術的意義と政策的含意などについて、数多くなされた。大きな論点となったのは、問題意識の強さから、やや強い主張が前面に出過ぎており、学術的裏付けが不足していると言える文章表現がないかどうか、政治的立場が出てしまっていないか、という点であった。そこにはアフリカの複雑な民族構成を学術的な観点から十分にふまえた概念設定がなされているか、といった論点も、かかわった。その過程で、本論文の主張の説得力については必ずしも十分に強いとは言えない面もあることが指摘された。論文には限界や問題点があることは、本人も了解したうえで、質疑応答がなされた。不足する点があることは否めないが、論文の一定の学術的成果の水準に達している

ことについては審査員も納得をした。そのため、審査委員会は最終的に審議した結果、本論文は博士（学術）の学位を与えるにふさわしい学術的成果であると判断した。